

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A Sketch of the History of Japanese Interrogatives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金水, 敏, KINSUI, Satoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000780

日本語の疑問文の歴史素描

A Sketch of the History of Japanese Interrogatives

金水 敏 (KINSUI Satoshi)

1. はじめに

2013年4月から3年の計画で、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」が始まった。タイトル通り、日本語の歴史を疑問文という切り口から調査・分析していこうというプロジェクトであるが、単に日本語の歴史資料を見るだけでなく、様々な方言・言語の疑問文の様相も参照しながら、日本語の個性・普遍性を明らかにし、また歴史資料だけでは変化の詳細や過程が明らかでない部分についても、対照言語学的知見に基づいて妥当な仮説を打ち立てていくことを試みるものである。

具体的な活動としては、年に3回程度の公開研究発表会を行うほか、年度末には一年間の活動をまとめた研究報告論集を刊行している。またすべての活動は独自のホームページから誰もが参照できるようになっている（URLは<http://j-int.info>）。

本稿では、このプロジェクトの活動を通じて明らかになってきた日本語疑問文の歴史の一端を素描してみたい。

2. 疑問文の基本的構造

疑問文の作り方は、言語によってさまざまである。例えば英語を見ると、助動詞転移（“Will you marry me?”のように、直接疑問文において、do, willなどの助動詞と主語の位置が入れ替わる）、wh移動（“When will you leave for America?”のように、疑問詞（不定詞）が文頭に移動する）のような特徴的な文法的操作が施されるが、日本語ではそのようなことは起こらない。逆に、日本語では「どこに行きますか」のように疑問を表す助詞「か」が文末に置かれるが、英語にはそのような疑問専用の文法成分はない。疑問専用成分を持つ言語でも、その成分を文末に置くか、文中の特定の位置に置くかという違いも見られる（トルコ語など。吉村（2014）参照）。例えば過去の日本語では、疑問専用成分を文中に置き、それと呼応して文末が連体形となる「係り結び」という現象が見られたが、係り結びに類似の現象は、今日でも琉球諸方言の一部やコリマ・ユカギール語などで観察できる（衣畑 2014a, 長崎 2014）。

このように、言語ごとの変異が大きいようにも見えるが、しかしよく観察すると、世界の言語に共通する面も見られる。共通点と相違点（普遍性と個性）を見極めるためには、疑

問文を大きく次の3つの観点から見ていくのが有効である。

- 意味論（命題意味論、様相意味論）の観点からの位置づけ
- 統語論的な観点（附：音声・音韻論的な観点）からの位置づけ
- 語用論・言語行為論・文章論的な観点からの位置づけ

それぞれについて、簡単に説明する。

意味論の観点からの位置づけ

疑問文の根底には、命題の真偽（文の内容が間違っているか、正しいか）が不定である、という性質がある。言葉を換えれば、真である可能性のある命題が複数存在するという事であり、また世界が多重化する（Aを選択した場合の世界、Bを選択した場合の世界、というように複数の世界が想定され、どれが現実世界であるか決められない）ということでもある。

ただしこのことは、直ちに「話し手は命題の真偽を知らない」ということには結びつかない。例えば「ああ、寒いと思ったら雪が降ってきたか!」のような一種の詠嘆文（感嘆文）は、疑問文の形を取りながら、話し手は命題を肯定的に受け止めている。「降ってきたか→降ってきたのだ」という談話は自然であるが、「降ってきたのだ→降ってきたか」の順番は不自然であることを考えると、「～降ってきたか」は事実を受け入れつつある過程（真偽不定から肯定へ）を表しているとも取れる。

一方、「誰がこんなまずい料理を食べに来るだろう」のような反語文は、疑問文の形を取りながら、話し手は否定命題を主張している（＝だれも食べに来ない）。

また「このすばらしい小説を書き上げた女性とは誰か。それは、紫式部である。」のように、文章の中で修辭的に疑問文を用いて課題を提示する方法もあるし、「『吾輩は猫である』を書いた文豪と言えば誰でしょう?」のように、話し手は答えを知っているのにあえて疑問文の形で質問する「クイズ・試験疑問文」も存在する。

つまり、疑問文は「真偽不定の命題を提示する」という意味論的な機能を持っているというのが本質であり、ここから下記のさまざまな特徴がそれぞれの言語の方法によって導き出される。本質は全言語に共通であるが、その実現の仕方は個別に異なる。

統語論的な観点からの位置づけ

先に見た、疑問文の意味が統語論（構文論）的にどのように実現されるのかという問題がここで扱われる。例えば、「アスペクト」や「テンス」や「モダリティ」と並んで、「疑問」という統語的な範疇は必要なのか、疑問の「焦点」（疑問詞を含む）はどのような統語的操作の対象となるのか、などといった問題である。「係り結び」やwh移動の問題もここで扱われるだろう。「一体」「はたして」といった副詞の統語的位置も関係する。

これに加えて、疑問文の種類分け（可否疑問文、疑問詞疑問文、その他）とその構文の違

い、直接疑問文と間接疑問文の関連と相違点、また間接疑問文が後発のものであるとすれば、発生と発達の問題もここに位置づけられる。

疑問文はしばしば、文末の上昇・下降、文全体の平板化など、特殊な音調（プロソディ）が与えられることがあるが、このことと統語構造との関連も考える必要がある。

意味論的な問題が言語普遍的であるとすれば、ここで扱う問題は語順を含め、言語類型的、言語個別的な問題となってくる。

語用論・言語行為論・文章論的な観点からの位置づけ

疑問文を、表現あるいはコミュニケーションの中で、どのように用いるか、またそのことと文の形式がどのように相関しているか、ということが扱われる。

日本語史の研究史の中で、疑問文はしばしば「問い」「疑い」「反語」「詠嘆」という分類の中で考察されるが、これは構造の問題であるとともに言語行為の問題でもある。「問い」すなわち質問をサールの適切性条件に沿って分析すると、次のようになるだろう（正常出力条件は省略）。

命題内容条件：真偽不定の命題である（意味論的な位置づけ参照）

準備条件：質問者は命題の真偽、あるいは疑問詞に当てはまる値を知らない。また被質問者は、それを知っていると見込まれる。被質問者は、問えば答えてくれる可能性がある。

誠実性条件：質問者は命題の答え（真偽、疑問詞の値）を知りたいと願っている。

本質条件：答えを得るための試みと取れる。

「問い」は、これらの条件を備えたものを典型とする。そのことに付随して被質問者に働きかけるモダリティの要素や、必要であれば（「です」「ます」等）丁寧成分を持つことがある。

「疑い」は、聞き手への働きかけを伴わない自問、あるいは単に真偽不定の命題を構成しただけの文型を指すと見られる。「このすばらしい小説を書き上げた女性とは誰か。それは、紫式部である。」（前掲）のような、文章構成上、課題を提示するための疑問文は、「疑い」の表現ではあっても「問い」の表現ではない。

詠嘆、反語についてはすでに述べたように、事態の肯定的受け入れの過程の表示や、否定の強調を目的とする文である。その結果、言語行為が異なるため、それぞれ専用あるいは準専用と言うべき語彙項目あるいは文法的形式が発達している場合もある。例えば古典語で言えば詠嘆の「～かも」「～かな」、反語の「～やは」「～かは」、現代語で言えば反語の「～ものか（もんか）」「～う・よう」（「誰がそれを認めよう」など。「誰がそれを認めるだろう」なら疑問文・反語文であいまい）がそれに当たる。

また、間接言語行為として、疑問文の形を取った主張・提案（例「この雲行きだと、雨が降るんじゃないか」）、申し出表現（例「カバン、持ちましょうか」）、依頼表現（例「お醤油

とってもらえませんか」等があり、これらは主張の表現、申し出・依頼表現の全体像の中での位置づけも必要となる。

先に挙げた、答えを得るためではなく、被質問者を評価するために行う「クイズ・試験疑問文」も語用論の問題として整理できる。

3. 疑問詞疑問文と肯否疑問文

日本語疑問文の歴史的な流れを統語論（構文論）の視点から整理した研究の早いものとして、柳田（1985）を参照しておきたい。次に挙げるのは、柳田（1985）に掲示された表である（竹村・金水 2014 により改編）。

表1 『竹取物語』と『天草版伊曾保物語』の疑問表現形式
（柳田（1985: 128–129）[表 11] 〈〉は竹村による補注）

	〈言語行為〉	〈中古〉竹取物語	〈中世〉天草版伊曾保物語
要説明の疑問表現	問い	疑問詞（……）カ……。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……ゾ。
	疑い	疑問詞カ……。 疑問詞……ゾ。	疑問詞……カ。
	反語	疑問詞（……）カ……。 疑問詞……。	疑問詞（……）カ……ゾ。 疑問詞……ゾ。
要判定の疑問表現	問い	……ヤ……。 ……カ。	……カ。
	疑い	……ヤ……。 ……ヤ。	……カ。
	反語	……ヤ（ハ）……。 ……ヤ（ハ）。	……カ。

ここから見て取れるのは、疑問詞疑問文（要説明の疑問表現）と肯否疑問文（要判定の疑問表現）とで構文が異なっている点である。「竹取物語」では、疑問詞疑問文は「か」の係り結び構文が中心で、文末「か」は存在しないのに対し、肯否疑問文では、「や」の係り結び構文が中心であり、文末「か」構文が存在する。

柳田（1985）から資料の時代を拡げ、かつ上代以前の体系も推定してその変遷を示したのが衣畑（2014b）である。同論文から図1を引用する。

	前上代		上代		中古		中世
疑問詞	カ係り φ		カ係り φ		カ係り φ		φ
肯否	カ係り カ文末	⇒	カ係り カ文末 ヤ係り ヤ文末	⇒	カ文末 ヤ係り ヤ文末	⇒	カ文末

図1 上代以前からの疑問形式の変化（衣畑（2014b: 73）〔図2〕）

ここで「φ」（ゼロ記号）で示しているのは、「ぞ」の係り結び構文、「ぞ」文末構文、係り助詞無しの構文を含んでいる。「ぞ」は疑問文だけでなく平叙文でも用いられるため、「φ」としたのである。

衣畑（2014b）では、この推移を次のように説明している。前上代では、疑問文であることを「か」または疑問詞の存在で示すことと、焦点位置に「か」を置くことの二つの規則で成り立っていたと推測する。肯否疑問文の場合、文全体が焦点でありうるので、「か」の文末用法が存在するのである。疑問標識の分布は疑問詞疑問文と肯否疑問文の性質の違いから説明できるので、疑問詞疑問文と肯否疑問文の違いを疑問の標識で示すということはなかったのである。しかし上代に入ると、肯否疑問文の方に「や」の係り結び構文、「や」文末構文が入ってきた。これは疑問詞疑問文と肯否疑問文を疑問の標識によって区別しようとする方向性が生じたことによると説明する。この傾向は中古に入って強まり、肯否疑問文の「か」係り結び構文が失われて両者の違いが際立たされた（中古、肯否疑問文から「か」が失われたことについては山口（1990）、野村（2001, 2005）も参照）。しかし中世に入ると、係り結び構文と「や」が減びたため、結局疑問の標識による疑問文の種類分けは再び失われた（同論文では「先祖返り」と表現されている）。前上代まで遡って日本語疑問文の変化の方向性を示した、重要な仮説であると考ええる。基本的にはこの方向性に沿って考えていくことが妥当であるが、今後の課題もいくつか指摘しておきたい。

4. 係り結びと焦点について

衣畑（2014b）では、前上代の状態から肯否疑問文の領域に「や」による表現が進入し、中古にかけてこの領域から「か」による表現を駆逐したとのことであるが、「なぜそうなったか」ということは別途問われなければならない。つまり、同時代の話者たちは「肯否疑問文に「や」を導入しよう」と認識してそのようにした訳ではないからである。なぜ肯否疑問文か、なぜ「や」か。その答えはおそらく「か」と「や」の機能の違いにあり、両者によって示されるという「焦点」の違いからもたらされるだろう。

ここで、“焦点”と呼んでいるものについて説明しておこう。主張や質問を表す文（意味論的には、“命題”）において、その一部分のみが新しい主張あるいは質問したい事項であり、残りの部分は前提・既知の背景的なことがらであるときに、「新しい主張」「質問したい事項」

を焦点と呼ぶことにする。例えば「昨日の試合では、(A 投手ではなく) B 投手が先発したんだ」という発話では、「B 投手が」という部分が焦点となり、「昨日の試合でだれかが先発投手を務めたこと」が背景的な情報＝前提となる。疑問詞疑問文では、原則的に疑問詞の部分が焦点となる(例「昨日の試合では誰が先発したの?」)。焦点が存在する文は、その焦点部分を述語にした「疑似分裂文」を作ることができる。例えば「昨日の試合で、B 投手が先発した。」(「B 投手が」が焦点)では、疑似分裂文は「昨日の試合で先発したのは B 投手だ」となる。

さて、「か」は元来、名詞の後ろについて述語を作る“コピュラ”(繫辞)の用法を持つ。特に、「A は B か」という、疑似分裂文の述語部分に用いられることがあるのだ。次のような例である。

- (1) 穿沓を 脱き棄るごとく 踏み脱きて 行くちふ人は 石木より なり出し人か
(万葉集・巻五・800 番)

先述のように疑似分裂文の述語はまさしく“焦点”位置であり、このことからして「か」はまさしく論理的な“焦点”を指示する機能をもともと持っていたと言える。この機能は疑問詞との組み合わせにおいても強い親和性を発揮する。

- (2) いづくにか舟乗りしけむ高島の香取の浦ゆ漕ぎ出来る舟(万葉集・巻七・1172 番)

なお、コピュラ用法を持つという点では「ぞ」(上代では「そ」)も同じである(「ぞ」は疑問文にも平叙文にも用いられる)。

- (3) この照らす 日月の下は 天雲の 向伏す極み たにぐくの さ渡る極み 聞こし食す 国のまほらぞ(万葉集・巻五・800 番)

これに対し、「や」はコピュラとしての用法を持たない。「や」は感動詞に近く、文の内容に対する注意喚起のニュアンスが強い(大野(1993)、阪倉(1993)参照)。そのことをよく示すのが、次のような副詞句に対する「や」の付加である。

- (4) み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我が独り寝む(万葉集・巻一・74 番)

「はた」は、「やはり」あるいは「ひょっとして」等の意味を表す文修飾語であり、このような成分が、文の論理的な焦点となることはありえない。また「か」は(「ぞ」も)決してこのような成分に付くことはない。「や」が付く位置は、たまたま論理的な焦点に一致することもあるが、焦点を目指して付加されるというよりは、発話上大きな切れ目となる位置(文末も含めて)に投下されると見てよい。「や」と「か」の分布の違いは、出来上がった命題

全体に対するモーダルな標識付けか、文焦点への論理レベルでの標識付けか、という「や」「か」それ自体の機能の違いから説明すべきものと思われる。

なお、「か」が厳密に常に焦点をマークするかというとそうとも言えないのは次のような例からも分かる。

- (5) 我がここだ偲はく知らに霍公鳥いづへの山を鳴きか越ゆらむ（万葉集・巻十九・4195 番）

この例で、焦点位置は疑問詞「いづへの山を」と考えられるが、「か」は「鳴き越ゆ」（鳴きながら越えていく）という複合動詞の形態素境界に投下されている。疑問詞疑問文では、「か」が文末に置かれることは上代～中古の文献にはないが、焦点位置とも言えないこのような例をどのように考えるべきか、歌の音数律など修辭的問題も絡めて、今後検討が必要である。

5. 中世以降の「か」の分布

衣畑（2014b）では、中世において、疑問詞疑問文は「 ϕ 」（ゼロ）文末、肯否疑問文は「か」文末という分布にたどり着いたように図式化されているが、後述するように、中世末期のキリシタン資料などでは疑問詞疑問文で「か」文末を持つ例が見いだせる。しかし、多数派である「ぞ」文末と機能が異なっている面がある。このことを述べる前に、まず現代共通語の疑問文と「か」の分布について確認しておこう。

現代共通語では、次に示すように、疑問詞疑問文でも「か」文末を持つ例が見られる。

- (6) a. 誰が来ましたか。【疑問詞疑問文】
b. 田中さんは来ましたか。【肯否疑問文】

ところが、非丁寧体では疑問詞疑問文と肯否疑問文で許容度に差が出る。

- (7) a. ?? 誰が来たか。【疑問詞疑問文】
b. 田中さんは来たか。【肯否疑問文】

なお、鳥取県倉吉方言、沖縄県那覇市ウチナーヤマトウグチなどでは（7a）のような非丁寧体・「か」文末の疑問詞疑問文が普通に用いられるという情報を得ている。また、明治時代の「書生ことば」などでも（7a）に類する表現が見いだされる。方言由来である可能性がある。こういった方言差については今後の課題となろう。

一方で、「か」を落とした疑問文も現代共通語では多く見られる。

- (8) a. 誰が来ました？ 【疑問詞疑問文】

- b. 田中さんは来ました？【肯否疑問文】
 c. 誰が来た？【疑問詞疑問文】
 d. 田中さんは来た？【肯否疑問文】

この場合には、文イントネーションが重要な働きをされると考えられる。
 これに対し、間接疑問文では「か」は必須である。

- (9) a. 誰が来たか分からない。【疑問詞疑問文】
 b. 田中さんが来たか（どうか）分からない。【肯否疑問文】

中世の状況と比べて、「か」文末が一般化したようにも見えるが、なお疑問詞疑問文と肯否疑問文の違いは見られるようであるし、それ以上に直接疑問文と間接疑問文の違いが露わになってきたようである。間接疑問文の「か」は必須の文法成分であるのに対し、直接疑問文のそれはむしろ音調と代替可能な伝達のモダリティの一部であると言える。

このような現代語の状況の萌芽は中世にもすでに見えている。竹村・金水（2014）によれば、中世末期のキリシタン資料では少数ながら疑問詞疑問文に「か」文末の用例があり、「ぞ」文末と対立をなしているという。同論文から表2を引用する。

表2 「疑問詞－文末助詞」の全体数（竹村・金水（2014: 6）[表2]）

資料 形式	キリシタン資料		抄物	
	天草平家 （口語）	サントス （文語）	玉塵抄 （巻4まで）	毛詩抄 （巻4まで）
疑問詞－ゾ	145	95	27	118
疑問詞－カ	34	1	2	0
疑問詞－ヤ	0	31	0	0
疑問詞－他	2*	4**	22***	3****
計	181	131	51	121

※注1： *「疑－ヤラ」「疑－ゾヤ」各1例。 **「疑－ゾヤ」4例

「疑－ヤラ」21例、「疑－ヤゾ」1例。 *「疑－ヤラ」3例。

この表に見るように、『天草版平家物語』（1593）では「ぞ」文末145例に対し、「か」文末が34例ある。「ぞ」文末と「か」文末の疑問文の違いを同論文は次のようにまとめている。

表3 『天草版平家物語』 疑問詞疑問文「ぞ」文末と「か」文末の違い

(竹村・金水 (2014: 16) [表 9])

	疑問詞－ゾ	疑問詞－カ
疑問詞	「なぜに」が多い。	「なぜに」との強い結びつきなし。
言語行為	〈問い〉が多い。	〈疑い〉が多い。 (〈問い〉では詰問調)
使用場面	会話文	地の文・心中思惟
構文の特徴	主節が多い	注釈的二文連置になりやすい。

注釈的二文連置とは、次のような例で、状況の背景に関する推測を注釈的に付け加えるものである。

- (10) 忠度はどこから引き返されたか、侍を五人連れて、俊成卿の宿所にうち寄せて見らるれば、(『天草版平家物語』巻三，原著 181 頁)

さらには次のように二文連置と間接疑問文の境界例のようなものも見られる。

- (11) 光能卿「当時はわが身も官をもやめられて心苦しい折節ぢゃ：また法皇も押し寵められさせられてござれば、何とあらうか、知らねども、うかがうて見う」と言うて、(『天草版平家物語』巻二，原著 146 頁)

このように「ぞ」と比べて「か」は心内語的であり、間接疑問文との親和性が高いが、間接疑問文の発達を考えるには、肯否疑問文も含めてその構造について考察する必要がある。

6. 間接疑問文とリスト表現

衣畑 (2014a) では、係り結びの衰退と間接疑問文の発達の関連について、興味深い仮説を提示している。すなわち、係り結びのように疑問標識「か」が文中にあっても、その作用域 (スコープ) が全文に及ぶような構文を持つ言語では、間接疑問文のように疑問標識「か」のスコープが文中の一部にとどまる表現があるとスコープの解釈に曖昧性が生じるので、その発達が封じられるというものである。現に中央日本語では、係り結びが中世末期に衰退してから後に間接疑問文や「～とか～とか」のような例示句や「誰かいないか」のような不定表現が発達している。同論文では、さらに宮古島諸方言によってこの仮説を検証している。

実例を挙げておくと、次の例では、文中の「か」があることで文全体が疑問詞疑問文となっている。

- (12) わが門に千ひろあるかげを植ゑつれば夏冬たれかかくれざるべき (伊勢物語)

これに対し、次の例では、「誰か」の「か」の勢力はこの句の範囲にとどまっている。それゆえに、この文は疑問詞疑問文ではなく、文末の「か」によって肯否疑問文になっている。

- (13) 「僕は話を聞きたいだけなのだ。誰か僕の言葉のわかる者はいないのか」

総馬の言葉は誰にも届いていないようだった。(上田秀人『波濤剣』徳間書店、2003)

もし現代共通語に(12)のような係り結びが残っていたら、(13)のような不定表現は発達の余地がない、という考えである。

さて、間接疑問文の発達を考える際、筆者が仮に「リスト表現」と呼んでいる表現類型について考える必要がある。

ここで言うリスト表現とは、次のような性質を持つものである。

1. 「X- 助詞 (後置詞)」という“単位”からなる。Xは典型的には名詞、あるいは節である(両方とも取れる場合もあり、片方だけの場合もある)。
2. 原則、2 個以上の単位を鎖のようにつなげることで表現が成立する。「X- 助詞 X- 助詞 X- 助詞……」。後に述べるように、不定語(疑問詞)がXに入る場合を除いて、1 個だけではリスト表現とならない。また、原則として何個でもつなげていくことができる。
3. リスト表現は全体として、一種の“副詞句”を形成する。ただし副詞句と言っても、様態副詞的でも陳述副詞的でもない。主題句に似ているが主題ともどうやら異なる。
4. リスト表現にさらに助詞が付いて名詞句のように振る舞う場合がある。

助詞「か」の場合について、具体例を挙げよう(外池(2014)も参照)。

- a. 選言タイプ:「田中か山田か」「田中が来るか山田が来るか」
- b. 例示タイプ:「田中とか山田とか」「田中が来るとか山田が来るとか」
「田中やら山田やら」「田中が来るやら山田が来るやら」
「田中なり山田なり」「田中が来るなり山田が来るなり」
- c. 連言タイプ:「田中も山田も」「田中が来ても山田が来ても」
「田中と山田と」「田中が来ると来ないとを問わず」(?)
「田中に山田に」

以下、「か」を例にとってさらに検討していく。

- (14) a. 田中か山田か、学生を一人呼んできて。
b. 田中か誰か、学生を一人呼んできて。
c. 誰か、学生を一人呼んできて。

- (15) a. 田中が来るか山田が来るか, 出席者が分からない。
 b. 田中が来るか誰が来るか, 出席者が分からない。
 c. 誰が来るか, 出席者が分からない。
- (16) a. 田中か山田か (を) 呼んできて。
 b. 田中か誰か (を) 呼んできて。
 c. 誰か (を) 呼んできて
- (17) a. 田中が来るか山田が来るか (が) 分からない。
 b. 田中が来るか誰が来るか (が) 分からない。
 c. 誰が来るか (が) 分からない。
- (18) 田中が来るかどうか (が) 分からない。

(14), (16) は X に名詞句が入るタイプ, (15), (17) は節が入るタイプである。両者は、名詞句か節かという違いがあるだけで、構造的にはまったく平行的であることが分かるだろう。(14-17) の b を見ると、X の部分には、疑問詞 (不定詞) (を含む節) が挿入可能であることも分かる。不定詞は、候補となる要素を当てはめることでリストの残りの部分を生成できるので、リスト表現と等価なのである。さらに (14-17) の c を見ると、たった 1 個の疑問詞 (を含む) 節も作り出すことができることが分かる。(16c) は不定表現, (17c) は間接疑問文と呼ばれるが、実はすべてリスト表現に包摂可能である。またこのような目で見ると、一般的に肯否疑問文の間接疑問文とされる (18) もリスト表現の一種であると見ることができる。

「か」によるリスト表現は、(14-15) の例に見るように、それ自身は格を持たず、別途、波線を施した名詞句が格成分として立てられる場合がある。江口 (1998) にならって、格を与えられた名詞句を「ホスト名詞句」と呼んでおく。「か」のリスト表現とホスト名詞句は、外延と内包をそれぞれ表し分けていると言える。江口 (1998) が指摘するように、「か」によるリスト表現では、「リスト表現 > ホスト名詞句」という語順が好まれる。

(16-17) では、ホスト名詞句がなく、リスト表現自身が格成分のように振る舞っているが、格助詞は必ずしもなくてよいという特徴がある。格助詞がある場合はリスト表現自身が名詞句相当となっている訳であるが、格助詞がない場合は、(14-15) の構造からホスト名詞句が省略された表現と見ることもできるし、格助詞だけが脱落した表現と見ることもできる。しかし現代語の書き言葉では名詞句の格助詞は原則的に落とすことがないので、ホスト名詞句の省略である可能性が高い。

この「か」によるリスト表現は、室町時代以降の口頭語性の強い文献で間接疑問文相当としてよく用いられている (高宮 2005)。リスト表現の形を取らない肯否疑問の間接疑問文もあるが、総体としてリスト表現タイプが主流を占めると言える。

- (19) 道ノニアルヲ岐ト云ソ カヨウカ、ヨハヌカ知レヌソ 字書ヲ引テミスソ (蒙求抄・一・40 ウ 13)

- (20) 上に産んだか下に産んだか存ぜぬ。(『エソポのハブラス』, 原著 413 頁)

高宮 (2005) によれば, (19-20) のような選択疑問文タイプのは, 室町時代前期から見られるのに対し, 疑問詞疑問文タイプ, あるいは「～かどうか」は出現が遅れるという (高宮 (2003), 衣畑・岩田 (2010) も参照)。

- (21) 悪党が多う籠つてゐたれば, 何たるもののしわざか存ぜぬなどと種々様々のことを語られた。(『天草版平家物語』 卷四, 原著 294 頁)

- (22) 久しいのだから利かどふかしれねへす。(深川新話 (1779))

このことは, 疑問詞疑問文の間接疑問文が, 直接疑問文から作られたのではなく, リスト表現の中で選択タイプから疑問詞タイプへと発達したことを暗示している。竹村・金水 (2014) で見られた「か」文末の疑問詞疑問文も, 主節というよりはリスト表現がたまたま主節のように見えているものと考えられることができるだろう。今後, さらに資料を精査して説を補強していきたい。

7. 終わりに

疑問文の歴史については, 「なぜ田中は来ないんだ」のように, 述語に「の (だ)」を含むタイプの発生と発達についても考える必要があるが, 本稿では割愛する。金水 (2012a, 2012b, 2012c) を参照されたい。

日本語の疑問文の歴史は, 係り結びという特異な構文を軸として変遷してきた。言語類型論的にも興味深い対象であり, 今後の研究の発展は一般言語学に対して貢献が期待できる。

●参考文献●

- 江口 正 (1998) 「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて—不定的同格要素として—」『九大言語学研究室報告』 19: 5-24. 九州大学言語学研究室.
- 金水 敏 (2012a) 「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会 (編) 『近代語研究』 第 16 集, 349-367. 東京: 武蔵野書院.
- 金水 敏 (2012b) 「疑問文のスコープと助詞「か」「の」」『国語と国文学』 89(11): 76-89. 東京大学国語国文学会.
- 金水 敏 (2012c) 「日本語の疑問詞疑問文と「の」の有無」『語文』 99: 45-57. 大阪大学国語国文学会.
- 衣畑智秀 (2014a) 「係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約—日本語史と琉球語から—」『日本言語学会第 148 回大会予稿集』 212-217. 日本言語学会.
- 衣畑智秀 (2014b) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』 61-80. 東京: ひつじ書房.
- 衣畑智秀・岩田美穂 (2010) 「名詞位置の「か」の歴史—選言・不定用法を中心に—」『日本語の研究』 6(4): 1-15. 日本語学会.
- 長崎 郁 (2014) 「コリマ・ユカギール語における疑問文—疑問語疑問文を中心に—」『日本語疑問

- 文の通時的・対照言語学的研究」第3回研究発表会資料（2014年3月20日，国立国語研究所）。
- 野村剛史（2001）「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』70(1): 1-34. 京都大学国語国文学会。
- 野村剛史（2005）「中古係り結びの変容」『国語と国文学』82(11): 36-46. 東京大学国語国文学会。
- 大野 晋（1993）『係り結びの研究』東京：岩波書店。
- 阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』東京：岩波書店。
- 高宮幸乃（2003）「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14: 116-104 [1-13].
- 高宮幸乃（2005）「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16: 104-92 [15-27].
- 竹村明日香・金水 敏（2014）「中世日本語資料の疑問文—疑問詞疑問文と文末助詞との相関—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（1）』3-20. 国立国語研究所。
- 外池滋生（2014）「疑問詞とカとモ」「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」第3回研究発表会資料（2014年3月20日，国立国語研究所）。
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』東京：明治書院。
- 柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京：東京堂出版。
- 吉村大樹（2014）「トルコ語の疑問文—日本語との対照的研究にむけて—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書（1）』93-116. 国立国語研究所。

《要旨》 疑問文の研究の視点を整理した上で，衣畑（2014a, 2014b），野村（2001），高宮（2003）等に沿って日本語疑問文の歴史的変化の方向性やその動機づけ等について概観する。

衣畑（2014b）によれば，前上代においては，焦点位置に「か」を置くという原則だけで疑問文形成の説明ができたが，上代に肯否疑問文の焦点位置に「や」も置かれるようになり，中古には疑問詞疑問文と肯否疑問文を区別する方向性が強められたとする。本稿では，なぜ肯否疑問文の領域に「や」が進出してきたのかという問いを立て，その説明のためには「か」と「や」の機能の違いに着目すべきであるということをも主張する。

さらに衣畑（2014b）では，中世にいったん疑問詞疑問文から「か」が消えたとするが，竹村・金水（2014）では中世末期のキリシタン資料で「か」文末の疑問詞疑問文が一定量存在することを示している。本稿では，竹村・金水論文で示された「ぞ」文末疑問詞疑問文と「か」文末疑問詞疑問文の性質の違いを踏まえ，「リスト表現」という形式の発達，および間接疑問文の発達という観点から，この新しい「か」文末疑問詞疑問文の起源についての仮説を提示する。

Abstract: This paper studies diachronic change in interrogatives in Japanese. The goal is to understand how and why Japanese interrogatives have developed historically. After giving a general survey of interrogatives, I review some of the previous studies, including Kinuhata (2014a, 2014b), Nomura (2001) and Takamiya (2003). I then present my own analysis, paying special attention to the interrogative particles *ya*, *ka*, and *zo*.

According to Kinuhata (2014b), interrogatives developed as follows: (i) in Pre-Old Japanese (*Zen Jōdai*) interrogatives were formed by addition of the particle *ka* in focus position, (ii) in Old Japanese (*Jōdai*) the particle *ya* began appearing in focus position in *yes-no* questions, and (iii) in Late Old Japanese (*Chūko*) the distinction between *yes-no* and *wh*-questions became

clearer as *ya* became more dominant in *yes-no* questions. The question then arises: why did the particle *ya* start appearing in *yes-no* questions (in stage (ii) above)? The answer, I suggest, is a functional difference between *ka* and *ya*.

Finally, although Kinuhata (2014b) claims that the particle *ka* disappeared in *wh*-questions in Middle Japanese (*Chūsei*), Takemura and Kinsui (2014) show through close examination of Christian documents (*Kirishitan shiryō*, from the late 16th and early 17th centuries) that some *wh*-questions in the late Middle Japanese did in fact end with *ka*. In the remainder of the paper, I propose an analysis of the origin of *wh*-questions with the *ka* ending. To support my analysis, I discuss how *zo*-final and *ka*-final *wh*-questions are different in nature, along with the historical developments of indirect questions and exemplification forms (which I tentatively call “example listing” (*list hyōgen*)).

金水 敏 (きんすい・さとし)

大阪大学大学院文学研究科教授。博士（文学）。神戸大学教養部講師、大阪女子大学文理学部講師、神戸大学文学部助教授、大阪大学文学部助教授を経て2001年4月より現職。2012年10月より国立国語研究所時空間変異研究系客員教授。主な著書・論文：『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房、2006）、『文法史』（シリーズ日本語史、共編著、岩波書店、2011）、『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003）、『コレモ日本語アルカ？－異人のことばが生まれるとき－』（岩波書店、2014）、『〈役割語〉小辞典』（編著、研究社、2014）。

受賞：新村出賞（新村出記念財団、2006）、豊田寛賞（日本英学史学会、1992）、日本認知科学会論文賞（日本認知科学会、1991）。

社会活動：日本語学会副会長・理事・評議員、日本言語学会会計監査委員、日本語文法学会評議員、訓点語学会委員、関西言語学会運営委員。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」

プロジェクトリーダー 金水 敏

（大阪大学 大学院文学研究科 教授／国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授）

プロジェクトの概要

疑問文は、意味論、統語論、形態論、語用論等さまざまな問題を複合的にはらんだ文のカテゴリーであるが、一部を除いてその研究は必ずしも活発でなかった。日本語においてもそうである。このプロジェクトは日本語の疑問文を特に歴史的変化の観点から探求していくことを目指すが、単に中央の日本語のみに着目するのではなく、日本語の諸方言、世界の諸言語における事象と積極的に重ね合わせ、その異同について検討することで、一般言語学への貢献を目指すものである。

プロジェクトの主な活動として、プロジェクトメンバーによる公開研究発表会を年に3回程度開催し、また研究報告論集も刊行している。これらの活動はすべて、プロジェクトのホームページ（<http://j-int.info>）から参照できるようにしている。